

手話をめぐる物語「ドクター・マリゴールドの処方箋」に
おける感情と倫理

溝 口 薫

Affect and Ethics in “Doctor Marigold’s Prescriptions” as a Story about Sign Language

MIZOGUCHI Kaoru

要 旨

本論はディケンズの「ドクター・マリゴールドの処方箋」に登場する聾啞の少女とそれを支える主人公に注目しアフェクト研究の手法を用いて物語に現代の読者にも通じる倫理の提示があることを複数の視点から明らかにするものである。

マリゴールドが深い共感を持って育てる聾啞の少女像は一見受動的に見えるが、彼女は、障害の自覚を持ち、なお独立した他者性をもって父に対する応答の意志を表す積極的な内面を形成している。この物語は、当時の聾教育のコンテクストに照らしてみると、少女が障害に寄り添う手話教育によって豊かな内面的成長を遂げている点で、当時隆盛になりつつあった障害者不在の口話教育推進に対する否定と読むことができる。またマリゴールドの物語としては、リベラルとしての自覚を持つ英国人の共感欠如を問題としている。彼は家庭の崩壊と再生を通して、人生における共感の重要性、ならびに他者への無関心や反対のエゴイスティックな独占を自制する必要性を学んでいる。この意識は、ある意味で今日の読者においても重要な感情の秩序と関わる倫理的認識であり、それゆえにこの物語は21世紀において再び注目されている。

キーワード：チャールズ・ディケンズ、感情、倫理、手話、19世紀の聾啞教育論争

Abstract

This paper aims to clarify Dickens's ethical treatment of characters, especially the disabled girl and the supporting hero in "Doctor Marigold's Prescriptions" using the affect study method. Also, this paper attempts to discuss the author's attitude toward sign language education by examining the educational background of the deaf at the time.

As for the deaf girl named Sophy, Dickens portrays her as a person with an awareness of the disability and independent alterity with firm willpower to respond to her father's dedication to her. In sign language and sign language education at the time, there was an oral education movement for deaf people. Unfortunately, it aimed to eliminate sign language as a primitive language. Oral education proliferated from the 1860s until around the middle of the 20th century. Dickens seemed to be against it by writing a story of Sophy's healthy growth in sign language. The story also proves that he paid close attention to the English educational practices of sign language in England. As for Marigold, the protagonist seems to represent the British liberal's lack of empathy. He tends to advocate liberalism for independence and self-esteem in the first part of the story. However, through his family's collapse and reconstruction, he recognizes the significance of empathy in one's life and the need for self-control over indifference to others and egoistic monopoly. This awareness is the most needed ethical recognition, even for today's readers, and that is why the story was revived in the 21st century.

Keywords: Charles Dickens, affect, ethics, sign language, deaf-mute education controversy in the nineteenth-century

1. はじめに

1865年、*All the Year Round* のクリスマス特集号に発表された Charles Dickens の「ドクター・マリゴールドの処方箋」は、作家自身がある書簡において “I hope and believe the ‘Doctor’ is nothing but a good’un. He has perfectly astonished Forster, who writes ‘Neither good, gooder, nor goodest, but super-excellent...’” (6 November, 1865 *PL*, XI 106) と述べているように、自ら上出来の作品であるとの自負を持ち、また彼の創作の盟友 John Forster からも絶賛が寄せられた作家後期の佳作である。こうした評価の裏付けがあったからこそこの短編はディケンズ自身による公開朗読の人気演目ともなり、広く世の支持を得るのであるが、その後一旦一般読者からすっかり忘れられてしまい、また研究者も最近に至るまで真面目に取り上げることがなかった。今日では、我が国においても本作品やディケンズの手になる朗読版の翻訳書が相次いで出版されており、その評価も一般読者の支持も再度復活している。この受容変動の背景には、ディケンズ作品に関するセンチメンタリズム研究の種々の深まりのほか、この作品の主要なテーマである手話や障害者に関する世間の理解の変化があるようだ。というのも、この物語が再度衆目にとまるようになったのは1970年代、Philip Collins が作家の公開朗読原稿を収集・刊行しこの作品を収めてからである。それは、手話を科学的な見地から研究し一つの言語として認める論考により手話の重要性を見直すきっかけを作った William Stokoe による *Sign Language Structure* (1960) が発表された後であった。また、聾啞の子供をめぐる物語でもあるこの作品に関する研究が本格的になってきたのは1990年代からであるが、それも1980年代、障害者を描く文学についての本格的な研究が始まってからのことである。こうした本作品の研究評価の潮流の変化が示して興味深いのは、優れた作品は時を超えてその価値を見出されていくということであろう。本論では、この作品の低評価の理由ともなってきた、センチメンタルでパセティックな特徴を持つとされるその表現を今一度見直すとともに、ディケンズの手話と障害を扱う文学にどのような先見性があったのかを検証し、その今日の読者にも称揚される作品の意義に迫る。

この作品がセンチメンタルであるとの評価を受けてきた原因は、Cheap Jack (叩き売り) である Marigold が、見世物小屋で虐待されていた聾啞の少女を引き取り、その子に手話と文字による言葉を教え、彼の亡くした実子に対するように大切に育て一人前にするという、いかにも感情に訴える筋や、また成長した娘が、結婚して彼の元を離れるもののやがてクリスマスの晩に帰還し、最後は孫も含めての感激の一族再会を果たすというクリスマスの物語にお決まりの設定が目立つからであろう。しかし、描かれている人物の感情やその働きは、一見そう見えるほどには単純でも皮相的でもない。また、叩き売りの声色で語られる物語の一人称の語りも、ディケンズならではの優れた聴覚を活かしたユニークな語りであるものの、その本領はそうした表層というよりはむしろ語られていない部分が持つ含蓄によって説得力を増すという巧みな語りとなっている。

そこで、本研究では、最近のディケンズ研究手法の一つであるアフェクトに注目する手法を

とる。アフェクトという語を用いる場合、特に無意識の強い情動に限定して用いる場合もあるが、本論では Parkins が依拠している Terada の分類にならない、アフェクトを広く feeling と同じ意味として使う。この場合のアフェクト研究とは、意識ではとらえられないような内面の力としての情動のほか、内面において働く力として捉えられる意識される感情を表現する emotion や、動きのない感情としての気分 (mood) という状態をもその対象とする (473)。アフェクト研究手法を適用する利点の一つは、人物の行動や判断は単に合理的な思考の判断によるばかりではなく、そこに感情が深く関わるものとして読み取る可能性を開くことであろう。その感情とは、表出されている感情かどうか、あるいは、当事者に明確に意識されているかどうかにかかわらず、内面に働いている力を指す。また意識が志向対象とする外界の事物や印象が提示されれば、そこからその人物の無意識の感情を拾っていくこともできる。こうした視点は、中期以降のディケンズ作品によく窺える内面表現である転写の手法、すなわち登場人物本人に意識されていない感情や感覚が周囲の登場人物によって示されるといわれる鏡像的な心理表現においてもその部分にその本人を動かしている内面の力を見ることができるようだ。

本論の構成は次の通りである。まず、聾啞の養女 Sophy の描き方に注目し、その行動に関わる感情の動きや力を分析する。言葉を話すことのないソフィは、一見いかにも受動的な存在に見えるが、実は能動的な存在として成長していく。その姿を通して、ディケンズの障害のある人物への表現姿勢を検証する。またこの聾者と手話、聾者の言語教育が登場するこの作品を、1860年代当時の聾教育をめぐる文化社会の文脈において考察する。当時、聾教育をめぐることは、あらたな改革の動きが起り始めており、その背景に照らすならば、この作品において描かれている成功に至る聾者ソフィの言語教育には当時の聾教育についてのディケンズなりの考え方が窺えると思われるからである。最後に、マリゴールド自身の描き方にも注目する。何より、この物語は、実際、彼自身の人生の物語でもある。彼は、ソフィの救済者あるいは慈愛深い父として注目されることは多いが、この物語には、養女ソフィとの出会いに至るまでの彼の人生の前半が描かれており、その前半生が後半のその慈愛深い姿とどのような関係があるのかはあまり言及されることがない。また、彼が前半生で直面している老いた両親の認知症、妻の家庭内暴力などの家庭の問題とそれらがもたらす暗澹たる孤独の問題は現代的な状況ともいえるだけに、検討してみる価値はある。本論は、以上のような三つの異なる視点から、手話と障害をめぐるこの物語が、今日の読者も共感を禁じ得ないどのような倫理的な意味空間を開いているのかを考察していく。

2. 聾啞のソフィの内的成長

2-1 ディケンズの障害者像

ディケンズの諸小説作品を振り返ってみると、実は障害のある登場人物を扱うのは珍しいことではない。ただその多くは、無力で弱く哀れな犠牲者としてセンチメンタルに描くか、あるいは、悪漢または滑稽な存在として対象化して描いていると批判を受けることも少なくなかった。Rodas は、こうした批判に対して、ディケンズの描く障害を持つ人物には、単なるアンビバレンス以上の複雑さが見いだされ、例えば、1843年に書かれた *A Christmas Carol* の Tim は単に同情のための対象化されたステレオタイプというわけではなく、障害者として明確な身体的

精神的なアイデンティティを持ち、かつ主体的な自己意識、感情を持つ人物として描かれているとする。

And yet, while the representation of Tim Cratchit may not mark any radical departure from existing tropes of disability, his underlying hubris and his potential for agency suggest the possibility of a disabled figure who will ultimately challenge the mediation of the satellite. ... [T]he reader here finds a character seemingly encompassed by satellite management; it is from Tim's father, after all..., that the reader learns of Tim's desire to be looked upon in church; and the other conventions employed to describe the Tiny one construct a disabled child whose physical and social movement is, indeed, severely restricted. But the glimpses of agency which may here be witnessed—the “active little crutch” the willful little mind, and the smug self-satisfaction of the boy who understands himself as exemplary—indicate the beginning of a shift in Dickens's sense of disability. (68)

ティムが自らを他者のキリスト教的自覚を促すために捧げられているという自己意識を持つということは、自己満足的でかつ高慢ともいえるものである。しかしロードスはそこに彼が他者の影響のもとにない主観的自己意識を持っている証しを見て、彼を単なる障害の犠牲者、あるいは周囲にいる様々な介助者の助けに依存した弱者に終わらせていないディケンズの進化を見るのである。またティムの社会的行動は障害によって著しく制限されているとしても、彼の操る「松葉杖」は、彼の社会的な欲望のその強さとともにティムの潜在的な行動力（agency）をも暗示しているという。では、『クリスマス・キャロル』よりはるかに後年に書かれたソフィの場合、その内面はどのように描かれるのか。

2-2 ソフィの障害とマリゴールドの手話による教育

まず、ソフィの聴覚障害の状況を簡単に確認しておく。マリゴールドは、以下の引用にあるように、初対面の場面で泥だらけの荷車の車輪の傍で居眠りをするその姿をサーカスから逃げ出してきた「獣」と喩えている。

...I looked about the back of the Vans while the performing was going on, and at last sitting dozing against a muddy cartwheel, I come upon the poor girl who was deaf and dumb. At the first look I might almost have judged that she had escaped from the Wild Beast Show, but at the second I thought better of her, and thought that if she was more cared for and more kindly used she would be like my child. (355)¹⁾

この獣という比喩は、言語習得以前に聴覚を失いそのまま放置された幼児であることを示すものである。実際、この時期に聴覚を失った幼児はそもそも親の言語を聞くことができないために音声による言語習得が不可能である。ゆえに音声以外の方法によって意思の疎通を開始して言語理解に至る必要がある。当時、そのような状況において放置され言語を理解できない聾者は人間以下の存在ないし「自動人形」と見なす伝統的な通念が残っていた（Carpenter Chapter 6）。ゆえにソフィのこの出発点は、マリゴールドが「気を取り直して」手話と文字を教える努力をしなければ、さらに大きな障害を背負う危機にあったといえるのである。

さてマリゴールドは、まずは、その子に安心と信頼を抱かせるように努め、それから意思伝

達の当初の方法として、対象と文字とを結び付けて理解できるように、例えば、道標など身近な事物や、自分自身を指さし、服に縫い付けた名前を指示することによって対象との関係を理解させようとする。ただ、初期には文字と指示物の arbitrary な関係を理解するには難儀したようで、ソフィは、マリゴールドの荷車を彼と勘違いしたり、あるいは、ウィンザー城が荷車になってしまったりなど、ユーモラスな失敗も描かれている。マリゴールドは、自ら骨片に刻んだアルファベットで文字教育も進めていくが、生活のなかで、彼らの意思伝達を大きく支えているのは、彼らの間で独自に作りあげられたジェスチャによる手話である。そのジェスチャの数は結局何百という数に上ることになるが、この視覚的な方法による伝達手段と文字言語によるマリゴールドの粘り強い指導の結果、のちにロンドン聾啞学校 (London Asylum for the Deaf and Dumb) と思われる学校に彼女を入学させた折、面接を終えた校長が、マリゴールドの家庭でのこの初期教育が非常に優れたものであるとその手腕を誉めていることから、それが成功したことがわかるのである。この時ソフィは16才になっていたが、ある書物の内容を読み、それをジェスチャで表現することができるほど、豊かな内容を伝える手話を操っている。ただその成功は技能面ばかりではない。家庭を離れ学校に進学することを泣いて嫌がる彼女を(彼自身も含めてではあるが) 次のような言葉で得心させている論しは彼の十八番でもあるのでは是非注意しておきたい。

“It drew a many tears on both sides when I commenced explaining my views to her, but what’s right is right and you can’t neither by tears nor laughter do away with its character.” (357)

この「正しいことのためには、一時の感情に流されてはいけない」という方針は、彼の手話と文字による教育に、「正しさ」という抽象的な内容や価値に対する理解を含んでいたことを示すのである。彼の正しさの主張はもちろん観念的なものではない。それは、何より「彼女自身が障害のために将来世界から孤立しないようにするため」、「ゆえに世界を理解する手段としての読み書きが完全に自由にできるようにするため」なのである²⁾。かように、彼女に対する教育は彼女の障害と彼女自身の幸福に関する深い共感的理解に支えられており、その上に彼女の内面を倫理的にも導くものとなっているのである。

2-3 ソフィの内面とその力

とはいえ語り手マリゴールドは、ソフィの内面について直接表現することがほとんどない。実際この語り手は、彼女の外見ですら、横着にも豊かな「栗色の髪」、「かわいい顔」くらいしかその特徴を伝えてはくれない。しかしそのような偏りと限界のある語りは、その欠如によって、彼女の内実を暗示するのである。以下の場面は、マリゴールドが商売をしているある晩のこと、彼が品物を付け加えようとして荷車をのぞき込み探そうとすると、声色一つで商売をしている叩き売りの状況は全くわからないはずの彼女が、荷車のなかで彼が探そうとしている商品をあまりにも的確に手渡すので、どうやって自分の表情を読むのか不思議がっている箇所である。

The way she learnt to understand any look of mine was truly surprising. When I sold of a night, she would sit in the cart unseen by them outside, and would give a [sic] eager look into my eyes when I looked in, and would hand me straight the precise article or articles I wanted. And then she would

clap her hands and laugh for joy. And as for me, seeing her so bright, ...it gives me such heart that I gained height of reputation than ever, and I put Pickleson down for ...fypunnote in my will.
(357)

この場面において、彼の表情を読むソフィはただ勘がよいのだと解釈するとしたら、もったいない箇所であろう。というのも、聴覚障害者が聴覚を補う手段として俊敏な視覚的観察力を発達させている事実をディケンズがよく知っていて、それを的確に利用している箇所と考えられるからである。つまり、マリゴールドは、叩き売る商品を付け加えようとして、荷車の背後をのぞき込む時、おそらくは無意識にその対象のほうへ視線を向けるはずで、ソフィは、彼の表情を熱心にもて、その視線の向かう先を一瞬で読み取って当該の品物を手渡しているのだからである。引用からは、複数の品物さえ違えず渡せていることがわかるが、ディケンズは、こうした出来事を通して、彼女の集中力や俊敏な状況判断力、知性、そして行動力を示すのである。もっといえば、そこに、自分の能力のすべてを使って養父マリゴールドの商売を少しでも手伝いたい、という強い欲望すら窺えよう。とすれば、この箇所は、彼女が自らの障害を受け入れてなお積極的、行動的であろうとする存在に育っていることをよく示す例と理解できるのである。引用の後半では、マリゴールドは彼女の行動の結果とそれが彼にもたらす喜びの深さを記述しているが、彼女のその行動の過程には気づいていない。しかし理解不能の部分があるというその距離、その暗黙の前提こそ、ソフィは彼にとって異なる存在であることが伝わるのである。彼女が彼にとって驚きをもたらす存在であることによって、彼女の他者性、そして主体性は暗示されている。

2-4 他者ソフィの固く強い意志

実際、ソフィは、マリゴールドの予測を超えた行動を繰り返す。たとえば、彼女が学校で過ごす二年間のうちに同じ障害を持つ恋人と出会い、いつの間にか求婚さえ受けているという出来事もその一つなのである³⁾。それだけ、ソフィは独立した主観を持つ存在であるのだが、それとは別に彼女の独自の内的な強さや欲望が見える例として、クリスマスの家族再会が描かれる物語の終局部をみてみたい。その場面で、一見して焦点となるのはソフィの健聴者の子供なのであるが、その子供を通して彼女独自の主観的意志が見えてくる。

結婚して中国に去ったのちに、生まれた子供が健聴者であるかどうかは、遺伝による障害の継続を心配するソフィの手紙を最後に再会の時点までは伏せられているため、その意味でも終局部において、声を有する子供の登場は、そのサスペンスを一気に解放する要素として、いやがうえにも読者の注目を集める。また、その女兒は、例の栗色の豊かな髪を持つ母親ソフィにそっくりな子供なのである。実子ソフィにも似ているこの子供の到来は、マリゴールドにとっては、よって二重、三重以上の喜びをもたらす喜びの極みとなる。

Looking full at me, the tiny creature took off her mite of a straw hat, and a quantity of dark curls fell all about her face. The she opened her lips, and said in a pretty voice:

‘Grandfather!’

...

In a moment Sophy was round my neck as well as the child, and her husband was a wringing my

hand with his face hid, and we all had to shake ourselves together before we could get over it. And when we did begin to get over it, and I saw the pretty child a talking, pleased and quick and eager and busy, to her mother, in the signs that I had first taught her mother, the happy and yet pitying tears fell rolling down my face. (369)

とはいえ、この子供が焦点となるのは、何も上で見た理由によるばかりではない。なぜなら引用の後半にも窺えるように、この子供は、マリゴールドに口話で話しかけ、かつ、彼自身が母親ソフィに教えた家庭の手話で母と会話しているからである。母ソフィは、声を有する障害を持たない子供に、夫との間で交わせる学校で学んだ手話を教えてもよかったはずである。が、敢えて子供に彼女がマリゴールドとともに使っていた固有の手話を教え込んでいる。となれば、この子供は母親との手話と、学校で学ぶ手話という、二種類の手話を操る存在ということになる。手話は、それぞれ異なる様式や方法によっているので、この子供が口話を話し、かつ二つの手話を操るということは、結局三つの言語を操っているということにほかならない。それは、子供にとっては大きな負担のはずだ。それだけに、物語の最後で、マリゴールドが、「幸せだけれども、切ない涙をハラハラと流す」のは、何も実子ソフィを想起したからというばかりではなく、この健聴者の子供の健気な行動を思いやってくることかもしれないと読めるのである。ともあれ、こうした苦労を子供にソフィが課すのも、彼女の養父マリゴールドの彼女への深い思いや献身にこたえようとする、固く強い応答の意志、すなわち、“responsi-bility” ゆえと見ることができるように思われる。

ソフィの帰還は、マリゴールドには知らされておらず、それは驚きの帰還であった。それは自発的になされているため、この家族の再会は、彼女のために孤独を忍んでいるマリゴールドにとっては望外のギフトとなろう。つまり、この場面での聾者ソフィは、もはや障害の犠牲者でも助けられるだけの弱者でもなく互恵的な他者の一人として、マリゴールドの前に帰還している。そこに到達した二人の関係性は、ゆえに、その意味でも先駆的である。他者を喜ばせることで、自らが喜ぶ、という必然的に相互的、相補的である他者と自己の根本的な共生のあるべき関係を示しているからである。

3. 1860年代の聾教育の変化

3-1 手話教育の成果を伝える「マリゴールドの処方箋」

さて、この物語において、ソフィの知的発達をはぐくんだ、マリゴールドの手話と文字による共感に基づく教育が、ソフィの成長において大きな役割を果たしていることは、今見た通りであるが、彼女がさらに学校に進んでより高度な読み書きのほか、学校の手話を学んでいる、という事実は、当時の聾教育をめぐる時代背景に照らしてみると、格別な意味を持つてくるように思われる。

言語習得期以前の聾教育は、英国においては、18世紀の中頃から始まっている。ただ、この作品が書かれた1860年代には、それまで、ほぼ100年にわたって、国内で実践されてきた伝統的聾教育の手法を大きく変貌させるある改革が顕著になってきたのであった。それは聾者に口話を目標とする教育を促す運動であった。もともと口話教育も聾教育手法の一つであり、読唇術と発音、発話を学ぶものである。だが前述した通り、言語習得期以前の聾者の子供に口話教

育を行うことは非常に難しいことであった。にもかかわらず、この口話教育運動は敢えて口話教育を聾教育のスタンダードとししかもこれを一元化することを目指したのである。すなわち、それは手話を廃するという排他主義的な運動となった。当時、Thomas Arnold という聾教育に携わる健聴者の教員が、純粹口話主義の最も名を馳せた運動家であったという。やがてこの運動は1878年、パリで開催された万国博覧会においてヨーロッパにおける口話主義教育の推進について会合が持たれるに及んで一気に隆盛となり、1880年、イタリアのミラノで開催された第二回聾教育国際会議において、口話教育を唯一の教育方法とする決定がなされ、その後20世紀の後半に至るまで、多くの国々の聾教育を塗り替えていく。その結果、手話は教育現場からは不適切なものとして締め出され、ただ聾者の仲間内だけで密かに使われる伝達手段になってしまったのである⁴⁾。

アーノルドをはじめとする手話排撃主義者は、国語の口語こそ人間の高度な思考を伝える「完全な道具」であるという考え方に立っていた。口語は抽象的な思考をも伝えるが、手話は、具体的なものしか表し得ない原始的で未開、未熟な言葉で、その不明確さゆえに到底言語として認められない、と決めつけていたのである。また手話と口語を同時に教えると、話し言葉や読唇術の習得、また正確な観念の形成が阻害されると主張していた。ゆえに、純粹に口語による教育によるならば、聾者は口語により健常者と同じように「正常」になれば、かつ、円滑に社会生活を送らせることができると一方的に信じ、口語教育による聾者のための社会的包摂を旗印に、聾者不在のまま、突き進んだ (Esmail Chapter 1)。

興味深いことに、イギリスにおける聾教育の19世紀の伝統的手法は、1792年、18世紀半ば以来の Braidwood の方式を受け継いだ Thomas Watson による聾教育に関する手法の出版物によって、広く広められていくことになる。その教育方法は、Carpenter によるなら、多様な方法による折衷主義であり、手話を否定せず、文字教育はもちろん、可能ならば oral method である口話教育を含むものであった。しかし、ワトソンは、口話教育は、言語習得期以前に聾になった子供には、大変な苦勞を与えるばかりではなく、成果もかならずしも高いとはいえないと考えていたようである。またワトソンは、フランスで盛んであった手話教育方法にも関心をもっており、その教育の中心的存在である Abbé Sicard とも交流していた。彼の聾教育についての出版物やその尽力により、19世紀の英国には聾学校は20か所以上に増えて、それらの学校では、同様に色々な方法が試されていたという。

このような事情に照らしてみると、この物語においてソフィが、口話教育によらず、ただ手話と文字という視覚的言語だけによって知的にもまた精神的にも豊かに成長し、さらに結婚を経て広い世界へと飛び立っていく姿が描かれていることの意味は大きい。それは、口話主義教育論者の上滑りで、聾者不在の欺瞞的横暴に対するディケンズなりの否定ではなかったであろうか。少なくとも、ディケンズは、手話を、具体的なものを指示できない未熟な言語とは思っていなかったようだ。また、聾者の子供にとっては、最初に必要な伝達手段であり、またその知的・精神的成長に必要な言葉と考えていたといえよう。今日、聾者にとって、その家庭で、健聴者と聾者の間に発生する自然言語としての手話の持つ知的、感情的内面形成役割は重要であるとされており、その意味で、ディケンズは当時の経験主義的な考え方に立つことで、むしろ、先進的になり得たのである。

3-2 ディケンズとハウ博士

ところで、*American Notes* には、ディケンズが視察した医学博士 Samuel Gridley Howe の盲学校訪問の次第が詳細に描き残されている。1842年、ディケンズが、アメリカ訪問で出会ったボストンの Perkins 盲学校長ハウは、世界で初めて盲聾啞の少女 Laura Bridgman に言語を教え、知的に発達させたその功績により高名になっていたが、だからこそ、ディケンズもその学校を訪れ、この少女にも直接会っている。そしてそのときの体験が、この物語にも影響しているという定説はいろいろな意味で否定できない。しかし、ハウは、1860年代には、アメリカ東部における口話主義論陣の先鋒にたっていた。彼は、それまでにアメリカにおいて発展していたフランス教育の流れをくむ手話教育を一掃し、その学校の生徒を自らの盲学校に吸収して聾口話教育を一元的に行うべく政治的にも働きかけてさえいたのである (Carpenter Chap 6, Lane 295)。1867年、ディケンズが二回目のアメリカ訪問をした際に、ハウは彼に書簡を送っているが、ディケンズのハウに対する応答がいかにもそっけないのは、ハウの当事者不在の強引な包摂のキャンペーンが彼の耳にも届いたせいであろうか。この時、ディケンズは、公開朗読巡業中であったが、ハウがパーキンズ盲学校への再訪を要請したのに対し、多忙を理由に実にあっさりとして断っているのである。ハウはといえば、その代わりに、彼に盲学校への特別な支援を要請するのであるが、これに対してディケンズは、彼の盲学校に、浮き出し文字による *Old Curiosity Shop* を250部寄贈するべく、1700ドルを支払うことで応えている (Archbold 58)。ディケンズが、直接訪問するかわりに彼のこの寄付の要請にこたえたのは、少なくとも、29才の折パーキンズ盲学校訪問において感じた感動と記憶へのトリビュートといっただろう。実際、当時彼が記した『アメリカ紀行』における盲聾啞の少女に対するハウの尽力への賞賛には、強い感動が窺える。

The thought occurred to me as I sat down in another room before a girl, blind, deaf, and dumb; destitute of smell; and nearly so of taste: before a fair young creature with every human faculty, and hope, and power of goodness and affection, inclosed within her delicate frame, and but one outward sense—the sense of touch. There she was, before me; built up, as it were, in a marble cell, impervious to any ray of light, or particle of sound; with her poor white hand peeping through a chink in the wall, beckoning to some good man for help, that an Immortal soul might be awakened. (*American Notes* 31-2)

ハウ博士が面倒を見たこの盲聾啞の少女についてのディケンズの表現は、障害者の内面を自分の主観で過剰に美化して書いていると批判されるところの多い箇所である。とはいうものの、「大理石の壁のたった一つの割れ目から、善良な人の助けを招こうとその手をのぞかせ」た少女を三重の感覚遮蔽という障害から、その「差し伸ばす手」である彼女に残された触覚を頼りに、言語の世界へ導いたハウの尽力は、やはり人類の博愛精神の一つの二本として賞賛せざるをえなかったであろう。実際、ディケンズは、ハウが、彼女に文字を教え、触覚で読めるように様々な工夫をするために教師たちを組織し、また自立を促すために手芸などの技術を教えていることにも触れており、盲学校の構内に障害者の働く場を設けるなど、社会化への支援設備にも言及している。マリゴールドのソフィの教育のための種々の創意工夫や社会化のための努力、あるいは、それに取り組む粘り強さ、献身の記述は、ハウの尽力もまた一つのソースとなっ

たと考えるべきであろう。

ただマリゴールドは、アーノルドやハウのような職業的聾教育者ではなく父としての個人的な立場で、ソフィを導く存在である。また、言語による知的発達と、職業的社会化をその到達目標にする専門家とは異なって、マリゴールドがソフィを導く社会化は、常に彼女自身が幸福になることに目標があった。それはそれだけ、専門家としての教育者の目標が機能的なものにとどまるのに対し、マリゴールドの父としての導きはホリスティックであるといえ、さらにいえば、アーノルドやあるいは後年のハウのような口話教育運動家たちが陥った教育成果や教育方法のみに関心を寄せる専門家たちの本質的な誤り—障害者に対する真摯な共感の欠如—を際立たせるのである⁵⁾。確かにディケンズが手話の言語性をどのくらいまで正確に評価していたか、という点はずみばかりではない。また、口話教育目標を否定していたということもいえない。しかし、少なくともこの物語の中では、自然発生的に生まれる家庭言語としての手話も、そして後々マリゴールドも操れるようになる学校で学ぶ手話も、障害を持つ存在の困窮を助け、それぞれ人間同士の関係を豊かにつなげるものとして共感をもって用いられ、その存在の幸せに寄与したことだけは確かなのである。

4. マリゴールドの描き方と内面の問題

4-1 情愛深さを導くことになる前半の物語の焦点

最後に物語の表題にもなっている主人公マリゴールド自身の物語を検討したい。冒頭においても述べた通り、ソフィと出会って以降のマリゴールドについては、このうえなく愛情深い信頼できる父親として位置づけられるのであるが、実は彼は、養女ソフィを引き取って初めて善き父となることができるのである。Furnaux は、こうした両性具有的な情愛深い傾向を持つマリゴールドの特質に注目して、従来この物語のソースとされてきた『アメリカ紀行』におけるディケンズのパーキンズ盲学校訪問とは別のソースの存在を指摘している。

Dickens's most detailed delineation of a man's intense emotional attachment to his adoptive daughter appears in his ...*Dr [sic] Marigold's Prescriptions*. Marigold's impulsive response to the circus girl offers a fairly close reworking of the central elements of Wilkie Collis's *Hide and Seek*. ... [which] has long been criticized as a poor imitation of Dickens's work. In its pioneering level of attention to a male emotional impulse to father a foster child, however, ... Collins's novel clearly anticipates a central plotline in a number of Dickens's 1860s Christmas stories, as well as providing the direct inspiration for elements of *Dr Marigold's Prescriptions*. (58-60)

ファノウによれば、そのソースとは1854年に出版された Wilkie Collins の *Hide and Seek* であるという。サーカスで働かされていた聾啞の娘を引き取って愛情深く育てる父が登場している点が類似しているからであるがそればかりではなく、ディケンズは、そのインスピレーションを、さらに1860年代のクリスマスの物語の折々に展開し、身寄りのない子供を引き取り育てる愛情濃やかな独身の父親たちの物語に展開していると指摘している。たとえば、“Somebody's Luggage” (1862年) の第二章、‘His Boot’ に登場する Mr. Englishman や “Magby Junction” (1866年) のなかの Young Jackson (またの名 Barbox Brothers) が登場する二章からなる物語などがそれにあたる。これらの父親は、いずれも他者に対して心を閉ざした存在であったが、幼子や

障害を持つ存在、あるいはそうした存在に慈愛を傾ける他者との出会いを通して共感の重要性と情愛に目覚めていくのである。

こうした系列のなかにおいてマリゴールドの物語を考えるならば、小さな点でいくつか異なる部分があるとはいえ、彼の物語もまた共生への転換がある物語として捉えられる。ただ、マリゴールドの場合、上記の中年男性たちがそれぞれ娘やあるいは信頼をおいていた身近な存在に裏切られた過去を持つがゆえに心を閉ざしているのに対し、マリゴールドの閉塞は自らが形成した家庭における破綻の結果に見える。積極的な働き者で、かつ明るいユーモアの持ち主である彼は、他者に裏切られたという過去を持たないため、彼の問題の原因は表面的には見えにくい。しかし、敢えてその家庭の崩壊過程に注意するなら、実は家庭の崩壊も含めて、彼の内面にこそ原因があったのではないかと推測できるのである。彼は一見、社会生活においてなんら問題ない存在にみえながら、上記の紳士と同様、うちに秘めた内気さがあるように思われる。実際、自分でも生まれつき“tender turn” (354) などころがあることからも、彼には生得の繊細な感受性があるようだ。それは、自他の関係において、豊かな共感に発展することもあれば、自己を孤高に導くことにもなりやすい性質である。以前の引用にみた、聾者のソフィがマリゴールドの叩き売り商売を思いがけなく手伝うことができるようになった場面の後半にも示されているように、ソフィが笑えば、「自分が商売で大評判になったみたい」嬉し気分になるマリゴールドではあるが、こうした感度のよい感じやすさは、とすれば、自他の区別をなく発揮されるなら、他者を独占しかねない危険さえもあろう。内気という性質をめぐって共感はいかに発達するのか、優れて働く共感には何が必要かという問いがこの物語の特異性を作っているのではないか。

4-2 マリゴールドの英国的リベラリズムと他者への無関心

彼は物語の前半では一体どのような人物として提示されているであろうか。まず特徴的なのは、マリゴールドの威勢のよい生きざま自慢であろう。流しの叩き売りを生業とし、その商売において精進することではだれにも負けないその意気よさ、気風は、以下の引用が示すように Willum と名乗る父親から受け継いだ親子二代の筋金いりの精神である。

I AM a Cheap Jack, and my own father's name was Willum Marigold. It was in his life time supposed by some that his name was William, but my own father always consistently said, No, it was Willum. On which point I content myself with looking at the argument this way: — If a man is not allowed to know his own name in a free country, how much is he allowed to know in a land of slavery? (343)

彼の父は、その名前の綴りとしては William であるとしても、呼び慣らされた“Willum”こそ自分の名前であって、「自由の国に生まれた男が、(国が新たに制定した) 戸籍法による表記なぞ気にするものか」と啖呵をきっていたことが紹介されている。さて自身の名前の呼び方一つにも、自分流をつき通すこの父の強い自尊心は、彼自身のそれでもある。なぜなら、マリゴールドは、続けて、国会議員選挙における候補たちの不実で浅ましい演説を、彼の生業である叩き売りの口上と比較し、風見鶏のように有権者の風向きに応じて媚を売るだけの定見も真実もない選挙演説を繰り返す“Dear Jack”とは違い、物の値段を安く下げて叩き売るそのやり方に

は、筋が通っており、客に対する媚も不実もない、とそのまっとうな商売ぶりを強調し、“Cheap Jack”のほうが、人間としてははるかに上等であるとおおいに自己肯定をするからである(348-9)。自分なりの誠実と誇りこそ彼の自己意識の支柱というわけであるが、そこに国家の支配や権威を拒絶し、個人の生業に正直に励む独立自尊こそ尊いとする英国の伝統的リベラルの精神を見ることは難しくない。その意味で、この物語は、1862年のクリスマスの物語における主人公が Mr. Englishman と名乗る偏狭な島国根性を持った存在であったごとく、国民性の一面を切り取ってその問題に迫ろうとする意図があるように感じられる。

だが、社会に向けてはかくも威勢のよい彼も、家庭生活においては、少なくともその人生の前半部分に関する限り生彩を欠く。まず、成人した彼が最初に直面したのは、認知症を患って商売道具と生活用具の区別もつかなくなり、介護先で迷惑をかける両親の問題である。見当識が失われた父が末期に張り上げるのは、かつての自慢の叩き売りの口上なのだが、支離滅裂なそれは、理性の抑制のきかない情動の奔流となる。

“Now come; what do you say after that splendid offer? Say two pound, say thirty shillings, say a pound, say ten shillings, say five, say two and six. You don't say even two and six? You say two and three? I'd sooner give it you, if you was good looking enough. Here! Missis! Chuck the old man and woman into the cart, put the horse to, and drive'em away and bury'em!” Such was the last words Willum Marigold, my own father, and they were carried out, by him and by his wife my own mother on one and the same day, as I ought to know, having followed as mourner. (345)

それでも、上記に窺えるようにこの妄言は、自分自身がもはや役立たずとなったという老人の認識や落胆が強く暗示され、痛切である。だが、養女ソフィの幸福のためには全身全霊をあげて取り組むマリゴールドは、無力となった父の心のこの暗澹たる叫びに対しては何も応答することがないまま葬式に臨むだけなのである。

また、彼は、どんなライバルにも負けない意気のよい魅せる叩き売りの口上を使って意気揚々、結婚に持ち込んだはずの妻が、実は抑制不能の感情爆発を起こす女性であったことを知るに及んだ時も、事態に対してなんら正面から向き合う様子がない。妻の発作的な感情の暴発は、大きな屋敷内なら距離を置くことも可能ながら、狭い荷車が家庭となれば身の置き所もなく (But have a temper in a cart, flinging language and the hardest goods in stock at you, and where are you then? (350))、あいにくの気質として諦めており、その彼女自身の痼疾の原因や不興の理由を考えてみようともしていないのである。彼女の感情爆発は、結婚による環境の変化も関係していよう。住み込みの使用人であった定住型の彼女にとっては、狭い荷車を住居として町から町へと巡業する生活は、予想を超えた大きな変化であったはずである。しかるにマリゴールドは、彼のノマド暮らしをロマンティックに語るばかりなのである。

We might have had a such a pleasant life! A roomy cart, with the large goods hung outside and the bed slung underneath it when on the road, an iron pot and kettle, a fireplace for the cold weather, a chimney for the smoke, a hanging shelf and a cupboard, a dog and a horse. What more do you want? You draw off upon a bit of turf in a green lane or by the road side, you hobble your old horse and turn him grazing, you light your fire upon the ashes of the last visitors, you cook your stew. And you wouldn't call the Emperor of France your father. (350)

実際、「道ばたに馬車を止めて」「自然のなかで誰かが残していった火でシチュウを作る」不安定で流動的な生活を誰でも享受すべき自由でもあるかのように述べる自己満足的自己肯定には、彼女を故意に無視するのではないにせよ、妻の強い否定的な感情を扱いかねた彼の弱さから生じる心理的逃避を見ることができよう。本来冷たい人間ではなくとも、もし他者の困難への共感の重要性を十分認識せず、また他者のネガティブな強い感情について率直に受けとめる姿勢を陶冶しなければ、他者と向き合うことはできない。また正しい解決を選択することもできない。つまりマリゴールドの抱える問題とは、端的に言えば、共感経験の不足による他者の軽視なのだ。その過誤のために、彼の家庭内の問題はさらに深刻な状況を引き起こす。このあと妻は、生まれた子供に対する暴力によって自分の怒りを発散するようになるからである。彼は、妻の子に対する暴力に直面しても、ただ彼女を制止するという具体的な行動しか取れず、それは妻の子に対する家庭内暴力を止める根本的解決ではないために、彼は、苦しむ子供を救うことができず、結局無為無力な父として、子を、そして妻を、ともに死なせてしまうこととなる。(また、その後、妻が自傷に至り、心の病をこじらせて自死に至った時も、その妻の苦しみに寄り添うこともできていない。)悲惨な家庭崩壊に終わる前半の彼の物語のその原因は、彼の他者に対する共感回避にあった。

4-3 マリゴールドの転換

さて、マリゴールドは傷ついた実子と養女の虐待を憂う他者から、深い共感体験の機会を与えられたことがきっかけとなって転換している。彼の実子ソフィは家庭内暴力を受けている最中に次のように述べているのであるが、その言葉はマリゴールドを自分自身だけの空間から他者のいる倫理的な空間へと導く最初の契機となる。

“Don’t you mind next time, father dear...; if I don’t cry out, you may know I am not much hurt. And even if I do cry out, it will only be to get mother to let go and leave off.” What I have seen the little spirit bear—for me—without crying out! (351)

傷つきながらも、無力な父を責めずになお父を庇うその勇敢な言葉に、マリゴールドは自らのふがいなさ、自分の無力さを一層痛感し、そのような自分に寄せられる共感の重要性を感じ取っていくからである。その意味で、マリゴールドにとっての実子ソフィは Scrooge に対する Tim に似た役割があるといえるであろう。おそらく、彼は、これまで自分の誇りである叩き売りの商売にいちずに生きてきているが、結局それは、いつも自身の誇りのためであった。一方で彼は、他者の存在にどのように向き合うべきであるのか、わかっていなかったのである。彼が家族の痛みや苦しみに直面したとしても、それを深く引き受けてその気持ちに応じることができなかったのは、共感関係にある他者の存在の重要性を理解できないために、その無行動の罪が見えないからであった。

物語は、こうした感覚を覚醒させるために、マリゴールドに徹底的な心理的な揺さぶりを用意し、周到に彼の転換を準備していくようである。ソフィが悪性の風邪によって健康を失ったのは折あしく鉄道の普及により最も稼ぎが悪くなっていた時期であった。そのためマリゴールドは、ただ糊口をしのぐために熱で衰弱した彼女を抱きあやしながら、ひたすら叩き売りをして日銭に稼ぎがなくてはならなくなる。子供は死期が近づくにつれ、もはや母の接近が決定的に

耐えがたくなり、マリゴールドに慰撫を求めて離れなくなるからである。

As there had been no bid at all, everybody looked about and grinned at everybody, while I touched little Sophy's face and asked her if she felt faint or giddy. "Not very, father. It will soon be over."

Then turning from the pretty patient eyes, which were opened now, and seeing nothing but grins across my lighted grease pot, I went on again in my Cheap Jack style. (353)

周囲の嘲笑のなか、あくまでプロとして叩き売りのスタイルを貫きつつ、同時に熱のために意識がもうろうとなっている瀕死の子供を小声で気遣うまるで正反対な役回りを交互にこなすその姿は、一種滑稽であるとともに極めて強烈な印象を放つ。それは、仕事と家庭という異なる領域においてそれぞれに求められる役割を必死で全うしようとする近代人の奇妙に追い詰められた分裂状況を彷彿とさせるからであろうか。こうしたギリギリの状況で、独立と共感の両立をかりうじて達成した時、ソフィは、飛び立つように亡くなっていくのである。

マリゴールドは、唯一深い共感を注ぎ交わす対象を失って、初めて本当の孤独に直面することになる。だが、マリゴールドは自分の態度を客観的に分析する存在でもなければ、それを語る存在でもない。その後の彼は、自責の念に駆られる妻の苦しみに寄り添うこともないまま、ただ孤独を抱えて商売の旅を一人呆然と続けていく。だが、物語のエコノミーのなかで、他者の苦難に対して無力な自分であるという課題に対する回答を探す内的な旅は継続されていたのであろう。彼は再婚を求めることなく旅を続け、やがて、実子ソフィと同じように豊かな栗色の髪を持つ獣のような少女という回答に出会う。

この邂逅に、見世物小屋で働く精神的遅滞がある大男 Pickelson が関わるのは、少々注目すべきことである。なぜなら、通常なら「話の相手にはしない」(354) 存在であったはずのこの男から、Miff 親方に虐待されている聾啞の娘の状況を聞くことになるのだが、彼は、その情報だけに反応するのではない。ピクルソンは、その少女の陥っている危機に、夜な夜な眠れないほど心配で苦しんでいる話を打ち明け、マリゴールドは要領を得ないその説明を通して感情が揺さぶられている。

When I heard this account from the giant otherwise Pickelson and likewise, that the poor girl with beautiful long dark hair, and was often pulled down by it and beaten I couldn't see the giant through what stood in my eyes. (355)

彼は、この後商売人らしく、ピクルソンから得たこの情報の価値に6ペンスの値をつけている(後に5ポンドの値に引き上げている)ものの、ここでは他者の苦しみを鏡像のように共感的に感じ取るピクルソンの感情をマリゴールドが写しとったかのように、彼は涙している。その意味でこれは他者の感情と共振した共感体験であったといえよう。もちろん、引用にも窺えるように、他者との共感の根底には、彼の実子ソフィを失った悲しみの記憶が関係している⁶⁾。マリゴールドの感じやすさは、このように、他者との共感を通して、より深い部分からの自己の感情をも共振させて、他者への行動を起こしていくのである。

4-4 深い独占欲を自制する

共生という倫理空間で生きることを決意するようになるということが、ディケンズのクリスマス物語の重要な主題であるとしたら、マリゴールドの転換で話は終わってもよいはずであ

る。だが、マリゴールドが、情愛深い父になったあとも物語は続くのである。つまり、彼には、ただ共感を持って生きることを決意するだけではなく、それをどのように維持するのかという課題があるようだ。彼に、養女ソフィと家庭を再形成するときに繰り返し持ち出す「正しさ」という視点があることは、その点で注目すべきであろう。それは別の言葉でいえば、マリゴールドには、共感の重要性を認識し体得したとしても、彼女への感情には正しい感情と正しくない感情という葛藤があるということである。彼自身、自分は「所有欲が強い」(359)という表現を使って、その傾向を自覚的に表現している。感じやすい彼は、ともすれば、ソフィを己のいいように独占してしまいかねない欲求があることを半ば意識しているのである。彼は、その語りのなかでは、執着の危険な深さには触れようとしめない。が、例えば、学校を修了する養女ソフィのために丹精を込めて用意した本がぎっしりと並んだ荷車「ライブラリー・カート」は、それ自体、彼女を独占し彼女を閉じ込める場所でもあることは否定できない。彼はこうした局面で、適切な自制を行使することのできる存在ではあるが、その自制によって彼のエゴイズムと対決する存在なのだ。たとえば、彼女に恋人が出来たことをピクルソンに教えられた時も、楽しみにしていた彼女との幸福な家庭生活を断念しなくてはならないために、暗澹たる思いに駆られたあまり、彼にしては珍しく、ソフィ自身は彼のことを好きでないかもしれないなどと勝手な思いにかられたりもしているのである。

ディケンズは、この物語の終局部でもこの種の問題の存在を暗示しているようである。彼女の結婚を認め再度孤独となったとき、彼は、かつての絶望的な孤独状態とは異なって、遠い家族に思いをはせつつ、悠々と独身生活を楽しむかの様子をみせているのである。が、その一点の曇りもないようなその姿とは裏腹に、彼の意識域にはソフィを専横したいという深い執着が漂っている。

Sophy's books so brought up Sophy's self, that I saw her touching face quite plainly, before I dropped off dozing by the fire. This may be a reason why Sophy, with her deaf and dumb child in her arms, seem to stand silent by me all through my nap. ...Over the hills and far away, and still she stood silent by me, with her silent child in her arms. (368)

彼はこの時、例のライブラリー・カートを自身の居室に当てているのであるが、夕食後まどろんだ折にソフィが聾啞の子供を抱いてずっと彼の側に立っているような夢を見るのである。このビジョンは、音信が途絶えている母子に対する心配の表れであるとともに、実は、生まれてくる子にもし母と同じ障害があれば、二人ともが彼を頼ってくれるのではないか、という彼の勝手な、密かな願望—独占欲—が表れているのではないであろうか。それは、支え助ける側が、支え助けられる存在に実は依存している共依存的な願望といってもよいであろう。それは、マリゴールドが「感じやすい」性質であるからこそ、感じる密かな欲望である。だが、その幻は、幸いにして、言葉を話すソフィの子供の明るい健康な声が聞こえるや、一瞬にして打ち消される。マリゴールドの執着は、このようにその根深さを暗示されながらも、危険性が増すことはない。先に見たように、彼は、さらにソフィをより深く思いやる感情に基づき、自らのエゴイズムや不当な執着を不当なものとして認識して自制するからである。

終局部でソフィー一家が、彼の元へ帰還し、マリゴールドにとっては、望外の喜びとなる再会で物語が閉じるのは、彼の共感的で濃やかな他者への深い共感への目覚めと、その結果として

の献身の報いである。だが同時に、その美しい完結は、己のエゴイズムに対する自制がもたらした賜物でもある。つまり、他者へのより深い思いやりを行動に移す内面の力を彼が獲得したこととともに、自制もまた、彼自身の内面の一つの到達点を示すのである。自制の力とは、19世紀という文脈でいえば、理性の力である。そして、今風にいえば、コミュニタリアン的な他者への配慮ができる徳、あるいは倫理的選択力ということもできる。ディケンズは、このように、マリゴールドのうちに、善き共生に必要な感情の秩序をその現実的な背景問題とともに、具体的に示しているといえよう。その一生の物語は、自己は自らの自由と尊厳に生きることがまずは基本であるとしても、他者の苦しみから目をそらさない深い共感の重要性の認識と、他者のために優れた自制ができる徳を持つべきことを告げる物語なのである。

5. 結 び

以上、後期ディケンズのクリスマスの物語である「マリゴールドの処方箋」を三つの方向から読み解き、ディケンズの障害者文学における倫理的な側面を明らかにした。まず、聾障害を持つソフィについては、そのアフェクトに注意してみれば、ディケンズは彼女に障害についての自覚とともに独立した主体的意識を持ち、また父に対する応答性への強い意志を備えた人物として描いていることが明らかとなった。また、手話や手話教育をめぐる当時の文脈において本作品の手話教育の描き方を考察した。その結果、この物語が書かれた1860年代当時から次第に盛んになりつつあった、手話教育を無視した聾啞者に対する観念的な口語教育運動に照らしてみるなら、手話教育を障害者の苦難に應えるものとして描いているこの作品は、それを通して、当時のイギリスの手話教育の伝統や教育実践を評価するとともに、間接的に口語教育を非難するものとして提示されている可能性があることを示した。さらに、この物語を、マリゴールドを中心に見た場合、それは彼の家庭の崩壊と再建を通じて、独立自尊を旨とするリベラルを標榜しがちなイギリス人の共感の欠如の問題を指摘し、かつ、あるべき理性と感情のあり方を示すクリスマスの物語となっていることを示した。それは今日の読者においても、最も必要とされる認識であり、そのために、この物語は、21世紀に再度復活したと考えられるのである。

付 記

本稿は2020年10月3日にオンラインで開催された「ディケンズフェロウシップ秋季総会—ディケンズ没後150年記念大会—」において行った研究発表の原稿に加筆修正したものである。

註

- 1) 以下“Doctor Marigold’s Prescriptions”からの引用はすべて Penguin 版により、頁数のみを括弧内に記す。
- 2) “I want to her sir to be cut off from the world as little as can be, considering her deprivations, and therefore to be able to read whatever is wrote, with perfect ease and pleasure.” (358)
- 3) Archibold は、聾啞の少女が同じ障害を持つ青年と結婚にいたり、海外に雄飛しさらには子供までもうけているというのは極めて異例であるとしながらもその含みについて以下のように述べている。At the same time that she is moving out into the world, she also becomes more deeply entrenched in deaf culture by marrying a deaf man. And consider how truly remarkable that fact is in some ways. One might think it common

to pair disabled characters together, but as Goldie Morgentaler notes, with the rise of eugenics, fear of the spread of undesirable traits through sexual reproduction led to restrictions in life and literature of such intermarrying. (130)

4) 1880年ミラノで開催された第二回聾啞教育国際学会の二つの決議は以下の通り。

① “the incontestable superiority of speech over signs for restoring deaf-mutes to social life and for giving them greater facility in language”

② “Considering that the simultaneous use of signs and speech has the disastrous of injuring speech, lip reading and precision of ideas, the congress declares that the pure oral method ought to be preferred.” (Carpenter, Chapter 6)

5) 医学博士ハウが口語聾教育の推進者となっていた事実を念頭におくなら、マリゴールドが医者ではないのに Doctor というファースト・ネームを持っているのには作家の当てこすりがあるかもしれない。事実、1842年以降、ディケンズとハウは個人的にもそりが合わなかった様子がある。

6) Marigold という花のシンボリズムに聖母マリアに捧げられる花としての意味があるため、彼の名は両性具有的な性質を表すといわれている。一方でこの花には grief という象徴もあるという (“Flower Meanings Dictionary from A to Z: the Secret Victorian Language of Flowers”)

<https://www.gardeningchannel.com/flower-meanings-dictionary-from-a-to-z-the-secret-victorian-era-language-of-flowers>

引用文献

Archbold, Diana C. “Dickens’s Visit to the Perkins School and ‘Doctor Marigold.’” *Dickens and Massachusetts: The Lasting Legacy of the Commonwealth Visits*. Ed. Diana C. Archbold and Joel J. Brattin. Amherst: University of Massachusetts Press, 2015.

Bell, Michael. *Sentimentalism, Ethics and the Culture of Feeling*. New York: Palgrave, 2000.

Carpenter, Mary Wilson. *Health, Medicine, and Society in Victorian England*. Kindle ed., 2010.

Dickens, Charles. *American Notes and Pictures from Italy with Contemporary Illustrations*. Intro. Sacheville Sitwell. Oxford: Oxford University Press, 1982.

———. *The Christmas Stories*. Ed. Ruth Glancy. London: Everyman, 1996.

———. “Doctor Marigold’s Prescriptions” *Selected Short Fiction*. Ed. Deborah A. Thomas. London: Penguin, 1985.

———. Letters. Storey Graham, Margaret Brown and K. J. Fielding, eds. *The Pilgrim Edition; The Letters of Charles Dickens*. Vol. 11 (1865–1867). Oxford: Clarendon, 1999.

Esmail, Jennifer. *Reading Victorian Deafness: Signs and Sounds in Victorian Literature and Culture*. Kindle ed., 2013.

Furieux, Holly. *Queer Dickens: Erotics, Families, Masculinities*. Oxford: Oxford University Press, 2009.

Lane, Harlan. *When the Mind Hears: A History of the Deaf*. New York: Vintage, 1984.

Parkins, Wendy. “Dickens and Affect.” *The Oxford Book of Charles Dickens*. Eds by Robert Patten, John O. Jordan, and Catherine Porters. Oxford: Oxford U P, 2018.

Rodas, Julia Miele. “Tiny Tim, Blind Bertha, and the Resistance of Miss Mowcher: Charles Dickens and the Uses of Disability.” *Dickens Studies Annual* 34, 2004: 51–97.

(原稿受理日 2021年3月14日)